

B. 自由研究（計画研究に含まれない研究課題）

C. 資料提供

(2) 応募および採択状況

平成元年度のこれら研究課題について106件（187名）の応募があり、運営委員会共同利用研究専門部会（西田利貞、浅野俊夫、久保田競、岩本光雄、杉山幸丸）並びに共同利用研究実行委員会（鈴木樹理、加納隆至、景山 節、小嶋祥三、野上裕生、毛利俊雄）との合同会議において採択原案を作成した。この原案は協議委員会（平成元年2月8日）の審議・決定を経て運営委員会（平成元年2月22日）で了承された。

その結果100件（176名）が採択され、各課題についての応募・採択状況は下記のとおりである。

課題	応募	採 択
計画 1	7 件（11名）	7 件（11名）
2	4 件（7 名）	4 件（7 名）
3	2 件（3 名）	2 件（3 名）
4	3 件（5 名）	3 件（5 名）
5	3 件（3 名）	3 件（3 名）
6	3 件（3 名）	3 件（3 名）
7	3 件（4 名）	4 件（5 名）
8	3 件（3 名）	3 件（3 名）
9	5 件（11名）	4 件（7 名）
10	5 件（14名）	6 件（15名）
11	6 件（10名）	4 件（4 名）
12	7 件（10名）	6 件（9 名）
13	2 件（2 名）	1 件（1 名）
14	5 件（9 名）	5 件（7 名）
15	4 件（5 名）	4 件（5 名）
自 由	39件（72名）	35件（69名）
資 料	5 件（15名）	6 件（19名）

(3) 研究会

平成元年度は、「研究会」と小規模の「ミニ研究会」が以下のとおり採択・実施された。

A. 研究会

1. ニホンザルの分布と個体数と生息環境
2. 動物の音声コミュニケーションからヒトの音声言語へ
3. 分布限界域におけるニホンザルの生息環境と地域個体群の動態

4. 第19回ホミニゼーション研究会「環境」を考える

B. ミニ研究会

1. 動物実験と実験動物の福祉
2. 視覚認知の心理学と生理学
3. 志賀高原横湯川流域に生息するニホンザル地域個体群の動態

2. 研究成果

A. 計画研究

課 題 1

宮城県におけるニホンザルの分布、個体数の現状と歴史の変遷およびその要因についての研究

伊沢 絃生（宮教大）

遠藤 純二（東浜小）

庄司由美子（川崎小）

これまで私たちは宮城県下のニホンザルについて過去の分布復元や、現在の分布・群れの数・個体数の推定等をおこなってきた。それらの研究成果を基盤に、本研究初年度の今年は以下の項目に重点を置いて調査を進めた。

①金華山のニホンザル5群については過去8年間にわたって継続調査を実施してきたが、本年は個体数増減にかかわる要因の一側面をさぐる目的で、5群の出産数とそれらのアカンボウが年間どの時期に何頭死亡するかを詳しく調べ、それらと気候変動や主要食物の季節的変遷等との対応を検討した。

②同時に、金華山ニホンザル個体数増減に深く関与しているはずの食物について、その生産量を知る目的でシード・トラップを3ヶ所設置し予備調査をおこなった。その結果は上々であり、次年度の本格的な作業の見通しを得た。

③奥新川、二口、七ヶ宿の3地域で群れの個体数調査を実施したが、いずれの地域でも以前より増加していた。その要因はここ数年の頻繁な畑荒らしや暖冬と関係している可能性が高いが、他資料も含め現在比較検討中である。

④かつてサルが生息し、1985年のアンケート調査で群れの生息情報がなかった地域のうち牡鹿半島、北上高地、栗駒山麓地域について調査した

が、やはり群れの生息を予測できる確かな証拠は得られなかった。次年度以降残りの地域について調査を継続する。

⑤同時に、上述した地域でのサル狩猟の歴史や森林伐採の歴史、開発の歴史等の資料を収集した。これらの作業を次年度以降も継続することで、それぞれの地域におけるサル絶滅の原因を明らかにできるだろう。

群馬県における調査研究

上原貴夫（長野県短大）

群馬県におけるニホンザルの生息分布について独自に調査を進めてきたが、本年は県の依頼により県林務部自然保護対策室によるほぼ全県にわたる生息調査に指導・助言の立場で参画する機会を得た。調査の重点地域は、（１）渡良瀬川上流とその支流（勢多郡東村、黒保根村、桐生市等）、（２）利根川上流水上町、赤谷川上流新治村、四万川上流中之条町、白砂川上流六合村、（３）烏川、相間川流域の榛名町、倉沢村、霧積、妙義山系にわたる松井田町、妙義町、下仁田町、（４）南牧川上流南牧村、神流川上流上野村などの地域である。調査は、事前調査１週間（７日間）、同１日による一斉現地調査、聞き取り調査によって行なわれた。調査にかかわった者は、県自然保護対策室職員、該当地区林業事務所職員、市町村役場職員、鳥獣保護員、猟友会員、地元住民等である。これらの調査によると群馬県下では、上記調査地域を中心として広くニホンザルが分布するが、それらの遊動域は全般的に従来の地域から人里へ近づく傾向にある。（１）の地域では沢入、押手、春場見、向沢入、神戸から花輪、座間、黒保根村八木原方面へ拡大してきている。（２）の地域では四万川上流域は1987年より出沒が見られたが、89年頃からは中之条町沢渡、反下、水上町小日向、栗沢、新治村永井周辺での出沒も顕著となってきた。（３）の地域では89年頃から倉沢村、榛名町方面へ出沒域が拡大してきている。松井田町、妙義町、下仁田町では、出沒域と農地、住宅地が入り組んできている。他方、碓氷峠周辺の山地では88年から逆に遊動する個体数の減少傾向が見られた。これはいわゆる猿害の進行ばかりでなく山中での諸工事による影響も働いたものと考えられる。（４）の地域では上野村浜平周辺に群れの出沒が

見られる。野生ニホンザルの個体数の確認には様々な困難が伴ない、正確には把握し難いが、上記の各調査地域について今回の調査とこれまでの筆者による調査を併せて推定される個体数は、

（１）約180、（２）約340、（３）約900、（４）約50個体、合計でおよそ1500内外の個体数であると考えられる。

近畿圏におけるニホンザル分布の実態調査

——その１．大阪府を中心として——

清水聡・金澤忠博・武田庄平

（阪大・人間科学）

近畿圏におけるニホンザル分布の実態を、実地調査および聞き取り調査によって明らかにすることを目的として調査を行なった。本年度は、大阪府下全域及び京都府の一部を対象に調査を行った。1986年から1989年までの間の生息状況の調査の結果、大阪府下のニホンザル分布の実態については以下の諸点が明らかになった。

１）ニホンザルの存在が確認された地域は、北部の北摂山地周辺および南部の和泉山地周辺であったが、いずれも一時的にハナレザルが現れただけで、常時生息していることは確認できなかった。1978年に実施された環境庁委託の調査結果によりメス・幼体を含む集団が生息するとされた北摂山地の島本町・高槻市の地域では、今回の調査結果からは集団の生息は確認できなかった。

２）1954年に餌付けされた箕面市北部に生息する箕面集団は現在も生息しており、箕面滝を中心に約2kmの遊動域を持って生息している。

３）大阪府最北部の能勢町北部には、夏期に定期的にハナレザルの出現が確認されていたが、これは北側の兵庫県多紀連山に生息する集団からのハナレザルである可能性が大きいと思われた。

京都府亀岡市においては、4箇所ニホンザルが確認されていたが、いずれもハナレザルであったようである。

以上のように、大阪府下には集団としては箕面に個体数200頭前後の餌付け集団が生息するのみであり、他の箇所で発見されるニホンザルは、箕面集団からのハナレザルおよび隣接する兵庫県、京都府、和歌山県に生息する集団からのハナレザルである可能性が大きいと思われる。